

CAP2018 in 福岡

史上最大の天文系科学コミュニケーション会議

CAP2018 (Communicating Astronomy with the Public) は、社会と天文学界とのコミュニケーションに関する最近の取り組みについて、さまざまな意見や経験を交換し、天文系の科学コミュニケーションの深化・発展を促す機会として、2005年に国際天文学連合 (IAU) が始めた国際会議である。ほぼ2年ごとに行われており、今回はメデジン (コロンビア) で2016年5月に開催されている (約30カ国から140名程度の参加、発表数147件)。

今回の開催地決定に関しては、世界中の複数都市が立候補し、2回にわたる審査を経て福岡市が開催地として選ばれた。アジアでは2011年の北京に次いで2度目、日本初となるCAP2018 in Fu-

kuoka大会は2018年3月24-28日に福岡市科学館にて開催された。

福岡市・国立天文台合同のLOCは、お互い離れていることもあり、開催が決定した2016年10月以降、大量のメールがML上を行き来した。委員長 (縣), 副委員長 (Lina Canas, 鷹野重之, 山岡均) を中心に財務、広報、会場、総務と四つのグループに分かれて任務を分担した。

27個人・団体より広告費/協賛金として約360万円、さらにクラウドファンディング (発展途上国からの参加者への旅費支援目的) で56名より67.8万円をご支援いただいた。

参加費は早期割で一般3万円、学生1.5万円、通常で一般3.5万円、学生2万円と通常の国際会議より割安に設定した。さらに格安の1日参加券 (一般5千円、学生4千円)、2日参加券 (一般8千円、学生7千円) を用意し、国内から気軽に参加できるよう配慮した。

広報はアートディレクションに力を入れ、メインビジュアル等を作成した (図1)。紹介ビデオ、ポスター、ウェブサイト、プログラムブック等が使われ好評であった。また、国内外の多くの天文教育・普及に関わる組織・団体が共催・後援・協力し、海外へ情報も行き渡り、発表申込み・参加申込み共に想定外の状況に至った。

10月18日までの発表申し込みには、423件の申し込みがあり、Canasと縣も加わるSOCメンバー14名が申請書を審査し、口頭発表、ワークショップ、ポスター、不採択に振り分けた。しかし、参加申込者の中には旅費支援が得られなければキャンセルする者も多く、最終プログラムは2月末まで確定しなかった。

参加登録は当初2月末までの予定であったが、



図1 「CAP2018 in Fukuoka」ポスター。

12月の時点ですでに300名を大きく超えていた。メイン会場となる福岡市科学館4階サイエンスホールは定員300名であり、急きょ4階の実験室3部屋を中継会場とした。それでも上限は400名程度と見込まれたため、SOC側と協議した結果、1月31日で受付を閉じるアナウンスを12月末に行った。参加申込みを予定していた方々にはお詫びを申し上げたい。

会場係にとっては初日約400名をどう開会式前1時間でさばくかが最大の懸案となった。そこで、前日に参加登録を済ませることを呼びかけた。この際、科学館またはプラネタリウムの入場券を提供するほか、サイエンスホール内で柴田一成会長に講演してもらうなどの工夫が見事に成功し、過半数を大きく超える参加者が前日に受付を終え、初日は混乱なく開会することができた。この会議はすべて英語で進行する国際会議ではあるが、日本人参加者に考慮し初日から3日間は、全体会のみ同時通訳で4階サテライト会場に届けるようにした。

総務は歓迎イベント、バンケット、お茶会など「おもてなし」を担当した。初日夕方の大濠公園能楽堂での能体験や、市民ボランティアと協力しての観望会、ウェルカム・カクテル等が行われた。また、ホテルニューオータニ・博多で中日の夕方に行われたバンケットも、和太鼓や津軽三味線の演奏などが特に外国人参加者から好評であった。一方、2日目の夕方には、村山齊氏の市民向け講演会がCAP会議の企画として行われ、参加した263名の市民から好評であった。

このように、今回のCAPは福岡市科学館を会場に世界53カ国から446名の参加者を集めたCAP史上最大の大会となった(図2)。最終的には招待講演5件、全体講演24件、ドームセッションを含む分科会講演が141件、20種類のワークショップを24コマ、さらにIAU100特別セッション、ポスター発表は前半・後半と2回に分けて展示し計111枚であった。また、多彩な付帯イベントを通



図2 会場を埋め尽くす53カ国から福岡市科学館に集まった参加者(大会2日目の記念撮影)。

し、会議の目的の一つである天文コミュニケーター同士のネットワーキングという観点からも、大いに成果が上がったものと思われる。CAP会議で得られた知見を参加者が母国に持ち帰ることで、各国における天文学・天文科学文化の発展、市民参加の推進などが期待され、すべての参加者の活動の幅が広がることが期待できる。国境を越えて、言葉や習慣、信仰や信条の違いを乗り越えて人類が一つになっていくことに寄与することが本会議の目的でもあった。

CAP2018がいかに盛り上がったかは、大会初日夕方にTwitterのハッシュド・タグ #CAP2018が、オランダ、イギリス、日本(福岡)においてトレンド入りしたことからわかる。

本報告文は、発表内容に触れる枚数はないが、大会テーマ“Communicating Astronomy in Today's World: Purpose & Methods”を踏まえ、混迷を深める国際情勢の中で、発展のための天文学、社会における社会のための天文学、そして、平和のための天文学を志向した活動報告や提案が目立った。天文学の発展や社会への浸透によって、天文学そのものが世界平和につながれば、または社会の健全な発展につながればと考え、その実践を発表した参加者が多かった。本国際会議の内容は集録誌として今年8月に刊行予定である。

縣 秀彦(CAP2018大会事務局長/国立天文台)